

## 同窓生シリーズ

第98回

21回生 小池 洋次  
Hirotsugu Koikeグローバル・ポリシー研究センター代表  
政策形成過程論、アメリカ政策研究、メディア論

略歴/1969年、新宿高校卒業

1974年、横浜国立大経済卒、日経新聞社に入り、シンガポール支局長、ワシントン支局長、国際部長、日経ヨーロッパ社長、論説副委員長

2009-19年関西学院大学教授

2019年からグローバル・ポリシー研究センター代表、関西学院大学フェロー。ケンブリッジ大クレアホール終身会員、日経新聞社社友

著書は『ソーシャル・イノベーション』『グローバル 知の仕掛け人』（以上、関学出版会）『政策形成の日米比較』（中公新書）、『アジア太平洋新論』（日経）。『政策形成』（編著、ミネルヴァ書房）『リー・クアンユー 未来への提言』（監訳、日経）など。hrkoike1022@yahoo.co.jp

## 自分の運を信じるということ

新宿高校の当時の雰囲気はいかがでしたか？

文武両道というか、勉強もスポーツも頑張ろうという生徒が多かったように思います。もちろん、独自の道を進む生徒もいました。

学生運動や労働運動が盛んで、世界中で変革を求める動きが活発になった時期でした。ですので、社会問題に多くの生徒が関心を持っていたように記憶しています。私もその一人で、変革を担う一人になりたいと強く思っていました。

そのような時代だったからでしょうか、ある同級生の影響を受けて進路を理系から文系に変え、マルクス主義経済学を学びたいと考えるようになったのです。その同級生はカントからヘーゲル、マルクスに至る哲学の歴史を説明してくれたのですが、彼の話を聞いたとき、特にマルクスに強くひかれ、受験勉強の最中に関連の本を同時に読んでいました。

横浜国立大学時代の思い出をお聞かせください。

大学に入り、社会改革を目指す動きに加わり、集会やデモに参加したのですが、そうした運動はあつという間にしぼんでしま

い、虚無感を覚えましてね。授業に出る気も起きず、アルバイ

トやフランス語学校での勉強に精を出していました。その語学学校で出会ったのが妻です。二人三脚は半世紀に近くなりました。

授業はさぼっても、ゼミには必ず出席しました。指導教員の故岸本重陳先生（経済学者）の魅力にひかれたからでしょう。先生は対外的な活動もされていて大変お忙しい、学生が自主的にゼミを運営したこともありました。早く亡くなられましたが、いまでも先生との対話を続けているような気がします。私にとって大学と言えは岸本先生と同義と言ってもよいくらいです。これから先生との「心のキャッチボール」を続けてゆくつもりです。進路については経済学者を目指していたのですが、やはり現実の経済を肌で感じるべきだとの思いもあって、企業や銀行の調査部門を考えました。ただ、大学の成績は良いほうではなく、大学が過激グループの拠点だったこともあり、就職はうまくゆきそうもありませんでした。そこで試験だけで入れる新聞社を考えました。半年ほどは、朝から晩まで勉強という毎日でした。日本経済新聞社に入れたのは本当にラッキーだったと思っています。

日本経済新聞の記者になりよかったこと、記者ならではのエピソードなどあればお聞かせください。

よかったのは世の中の動きの最前線に身を置けたことです。最初は官僚や政治家取材していました。新聞だけではなく雑誌でも記者として活動しました。体力があつて、好奇心が旺盛で、人と会ったり文章を書いたりするのが好きな人にとっては最高の仕事です。名刺一枚で誰にでも会える職業は他にないでしょうね。記者になって15年ほどでシンガポール特派員となり、その後は国際報道にかかわってきました。シンガポールでは、建国の父で当時の首相だったリー・クアンユー氏に何度もインタビューできたことが何よりの思い出ですね。米国の首都ワシントン駐在の時には大統領専用機（エアフォースワン）内で、当時のビル・クリントン大統領にインタビューできたのは貴重な経験でした。1993年7月4日、独立記念日のことです。米国の大統領は外国人記者が1対1で会う機会ほとんどあり得ないのですが、様々な偶然が重なって実現しました。大統領になってまだ半年ということに、私の質問への答えが完璧であったことに大変驚いたことを覚えています。写真はそのインタビュー風景です。大統領は当時46歳で、若々しいです。

記者時代は、もちろん、よいことばかりではありません。失敗は無数にあり、壁にぶつかったことは何度もありました。それでも何とかやってこれたのが不思議な気がします。懸命にしていたらだいたいのお寺の住職の影響が少しありますが、嫌なことでも失敗でも、そうした経験が自分を強くしてくれるのだから感謝しなければならぬと考え始めてから、気持ちがずいぶん楽になりました。

関西学院大学の紹介や、受け持ちされた学部のお話などを

お聞かせください。

関西学院大学には10年間お世話になり、退職後もフェローとして活動しています。所属した総合政策学部は比較的新しく、皆で何かを作り上げようという熱気を感じました。キャンパスは本当に美しく、日本一ではないかと思えます。大学は教員、職員、学生で成り立っていますが、勤務した学部は皆の距離が近く、和気あいあいという感じでした。私の研究室には予約なしで学生が入ってくることもあり、にぎやかでしたよ。

グローバルな分野や舞台で活躍したい、仕事がしたいと思っている新宿高校生に先輩からのアドバイスをお願いします。

グローバル人材の要件を考えれば、多くの方々が指摘するように、国際言語の英語でコミュニケーションができ、世界で起きていることを理解し、日本のことを英語でしっかり説明できることが大事です。そうは言っても、いきなりは無理でしょうね。まずは、5分かつ10分でもいいですから、毎日ネットでCNNのニュースを聞き、そのニュースの英文を音読することをお勧めします。毎日一つでもいいですから、日本のトピックを1、2分、英語で説明するのもよいですね。

英語については耳から慣れることが大事です。音楽でもドラマでもよいのですが、継続して視聴すると、その言い回しに気が付き、やがて自分で使えるようになるものです。英語のポピュラーな歌を丸暗記するのもよいですね。私もやっていました。

コロナ禍でも頑張る新宿生にメッセージをお願いします。

様々な制約の中で皆さん、いろいろな苦労されたことでしょう。私のこれまでの経験を振り返ると、まず、お伝えしたいのは、自分の運を信じるということですね。新宿高校で勉強できたのですから、皆さんには素晴らしい運があることは間違いありません。自分の運を信じると不思議と案になりに力が出てくるものです。次に、何事も学びであり、自分の成長につながるということをお伝えしたいですね。失敗は大事な学びにつながるわけですから、長い目で見ればプラスなのです。最後に強調したいのは、幸せと生きがいとは主観的なものであり、それはどこにいても手に入れることができるということです。

進路選択や就職は偶然に左右されるものです。どのようなところにいようと、一生懸命取り組むことです。そうすると、やがて、やりがいを感じ、楽しみを見つめることができるようになるでしょう。そう考えることによって選択の幅が広がってくると思います。

お忙しい中、貴重なお話をありがとうございました。



米大統領にインタビューする小池さん